

対人援助学&心理学の縦横無尽15

TEM (複線径路等至性アプローチ) 世界を駆ける (3)

2014 年 3 月ブラジル、4 月デンマーク、8月オランダ・デンマーク



サトウタツヤ@立命館大学文学部心理学専攻

1 前口上

前回の「世界を駆ける (2)」は、2013 年の活動報告でイタリア・デンマーク・イギリスでの活動であった。その最後に「2014 年は、再度ブラジルに行く予定である」と書いてあったのを覚えている読者も多いと思う (いるわけないか？と自己ツッコミ)。

実際には、ブラジルの後、デンマーク、オランダ・デンマークと 3 回にわたって海外渡航をしたので、その様子について書いていきたい。いずれも主題は TEA (複線径路等至性アプローチ) である。

複線径路等至性アプローチとは、システム論に基づく質的研究法的一种である。おかげさまで国内外から関心をもってもらうことができおり、本誌でも既に二回「複線径路・等至性モデル、世界を駆ける」と題した活動記録を掲載させてもらっているのご参照いただきたい。

2012 年 1 月イタリア、3 月ブラジル

<http://www.humanservices.jp/magazine/vol8/16.pdf>

2013 年 3 月イタリア、デンマーク、5 月イギリス

<http://www.humanservices.jp/magazine/vol13/17.pdf>

TEA のサイトもリニューアルされている。

<https://sites.google.com/site/kokorotem/whatistem>

というわけで、今回は、2014 年に行った 3 回の活動について報告してみたい。

2 2014 年 3 月 ブラジル

3/10～13 パイア州にて第3回文化心理学セミナーに出席した。このセミナーには欧州(デンマーク・ノルウェー・イタリア)、南北アメリカ(アメリカ・チリ・コロンビア)、アジア(日本・中国)など世界

中の人々がブラジルに集まり、様々な側面から文化心理学の枠組みや概念などについて討論を行った。筆者は僭越ながら、心理学的な媒介作用に関する様々な発表に対してまとめの講評を行った。



写真の人物が主催者であるアナ・セシリア・バストス先生である。バストス先生はブラジル人家族の発達的な文脈と移行を 30 年にわたり調査している。そして「発達的な文脈と径路」が、人生の移行にアプローチする TEA (複線径路等至性アプローチ) の精神と合致するとして、私たち日本人グループを厚遇してくれているのである。



また、3/14 にはバイア州立大学で文化心理学のシンポジウムがあり、方法論としての TEA (複線径路等至性アプローチ) について講演した。

ブラジルで驚くのは、ビールを冷たいままで飲もうとする努力。いわゆるハカマを使って保冷を徹底しているのだ。



なお、この時も院生を含めてかなり大がかりに移動して参加した。院生視点からみたその様子は以下のウェブサイトの下の方にも掲載されている。

<https://sites.google.com/site/satozemigyoseki/home/2013nian-du-hai-wai-du-hang>

3 SECTION2 2014 年 4 月 デンマーク

2014 年 4 月は、以下のようなスケジュールで、PBL (Problem-Based Learning) 調査と第2回 Niels Bohr 記念文化心理学シンポジウムへの参加を行った。

4/21・Aalborg 大学・Valsiner 教授と『Trajectory Equifinality Approach』の出版打合せ
 4/22・Aalborg 大学・Mogens 准教授から PBL と心理学プログラムに関する説明をうけ、今後の提携について打合せ
 4/23・Aalborg 大学・ユネスコチェア (PBL) の Kolmos 教授から同大学の PBL に関する説明をうけ、立命館大学と同大学における法心理学に関する提携可能性について打合せ
 4/24・Niels Bohr 記念文化心理学シンポジウムにおいて、指定討論
 4/25・引き続き同シンポジウムに参加。さらに、このシンポジウムの記録の著書出版に関する打合せを行った。

このうち、記念写真だけを載せておく (2014 年 4 月 22 日、オールボー大学にて)。



右から 2 人目のモーエン准教授にいろいろと予定を調整してもらい、オールボー大学の PBL、特に心理学の PBL について、ある程度の知識を得ることができた。PBL 調査の詳細については、次号に掲載することにした (対人援助学マガジン 19 号)。

4 SECTION3 2014 年 8 月 オランダ+デンマーク

4-1 プレビュー 2014 年 8 月 17~31 日

オランダ・デンマークに出張。最初に言っておきたいことは、今回の八月後半、オランダ・デンマークは寒かった！とにかく異常気象だった！ということ。半袖で過ごすことは一日たりともできなかった。気温があがってもせいぜい 15-18 度なので、晩秋という感じだった。

ヨーロッパ文化心理学院生の会・第 8 回国際対話的自己学会・コペンハーゲン大学文化心理学サマースクールへの出席という長丁場の旅行となり、いずれも TEA (複線径路等至性アプローチ) についての講演・講習会が組み込まれていた。

費用について、今回はなんとご招待。コペンハーゲン大学のプロジェクトから航空運賃を出してくれるというのだから、ありがたいかぎり。手続きが煩雑なのかと思いきや「何もない！来てるんだからそれで OK!」とのことで拍子抜け。日本だったらパスポートのコピーから始まり書類の山が必要なところなのですが……。大らかなシステムで快適でした。

大まかなスケジュールは以下のとおり。

8/18 ヨーロッパ文化心理学院生の会 (University of Haag) にて「Trajectory Equifinality

Approach; Concepts and basic practice. Lecture and thematic group discussions」の講演。

8/19-22 第8回国際対話的自己学会（University of Haag）に参加。

8/23 ハーグからコペンハーゲンに移動

8/25-29 コペンハーゲン大学で行われた文化心理学サマースクールに講師として参加。

8/30 Valsiner 教授らと京都での法心理学サマースクール開催について打合せ。

8/31 デンマーク出国

9/1帰国

4-2 オランダ編

2014年8月18日

ヨーロッパ文化心理学院生の会（University of Haag）

10.00 – 12.30 : Trajectory Equifinality Approach; Concepts and basic practice.

Lecture and thematic group discussions



TEA（複線径路等至性アプローチ）について解説した後、昼食時間を利用して、お互いにインタビューをして TEM（複線径路等至性モデル）の練習を行ってもらった。

お昼ご飯は近くのレストラン。私はルッコラのサンドイッチを選んだ（おいしかった）。



TEM づくりのためにインタビューしている風景（イメージ写真）



今回のワークショップをやってみて分かったのだが、TEM は、インタビューによって分岐点をどう引き出すのか、というところが重要であり、逆に言えば、インタビューの仕方に分岐点の引き出し方をしっかり組み込んでおくということが重要なのだらうということになる。参加者の皆さんが描いた TEM（もどき）は以下。



この日の夕食は、オランダの旧植民地だったインドネシア（蘭印＝オランダ領東インド）料理を食べに行きました（コペンハーゲン大学のご招待。ありがたい。。）。エスニックフードといえば聞こえがいいですが、歴史的経緯を知る必要もあります。



真ん中にいるのが、ペニーラ・ヴィ先生（コペンハーゲン大学）。後ろに掛かっている絵にも注目。

2013 年 8 月 19～22 日 第 8 回国際対話的自己学会（University of Haag）

前回のこの学会はアメリカ開催だったので（行くのが面倒で）すっぽかしたので、4 年ぶり 3 回目の参加となった国際対話的自己学会。今回はシンポジウムの企画 1，シンポジウムでの発表 1，院生との連名発表 3、ということなので、しっかり参加できたのではないかと感じている。

まずは東大の能智先生と一緒に会場の前で記念写真（左）。学会長のヒューベルト＝ハーマンス先生がいたので、日本人で集まって記念写真（右）。今回、日本人の参加者は 29 名で、オランダに次いで 2 位（ブラジルからの参加者も同じく 29 名で同率）とのことであった。



私が行ったシンポジウム発表 1 つ目は、アグニエスツカ・コノプカ先生の「コンポジション・ワーク」に関するもの。

対話的自己の各ポジションについて石を使って表現するというワークを彼女が開発しているのだが、それを TEA（複線径路等至性アプローチ）の立場から検討したというものになった。

今回のシンポジウムは、午前、午後に分かれており、午前中は森岡正芳先生が「間」についてご発表。「Space-between」と訳されることが多いが、「Time-between」でもあり、「Chronotope-between」ということになるのだろう。

さて、コンポジション・ワークは箱庭と同じようなものと考えても良いが、箱庭が様々な人形や小道具を使えるのとは異なり、コンポジション・ワークの場合は使えるのは石だけ。そしてその表現する対象はあくまでも、「**としての私」という表現を追求するものである。以下が参考のコンポジション・ワーク。彼女が2012年に来日して島根の日本パーソナリティ心理学会で講演した時のパワーポイントである。感情を石で表しているとみるだけではなく、不安＝心配性の私、ソフト＝優しい私、というように「自己の配置」として見ていくのである。



西洋的な自己は、非常に強力な単体が想定されているが、コンポジションワークでは、その自己に「場所を与える」ことが目指されている。場所に余裕ができれば争いはなくなる、というのである。

細かい説明は省くので、興味のある方は、いろいろ調べてください。と思って自分でグーグルで検索したら、彼女が2012年に来日して島根の日本パーソナリティ心理学会で講演した時の動画がアップされていて驚いた。私が日本語で喋ってる。。

<https://www.youtube.com/watch?v=aUuz2lSqZyc>

ご本人のサイトは

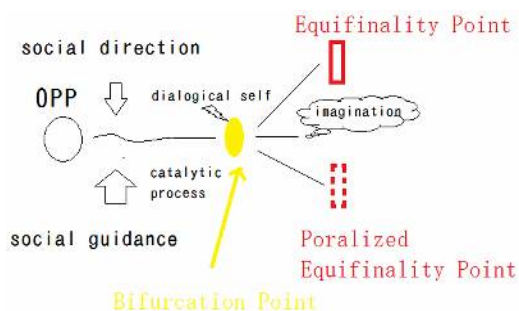
<http://www.konopka.nl/>

さて、私の発表は「自己にスペースを与えるだけでは十分ではなく、時間的広がりも与えましょう、ということになる。TEM がもつ時間重視の姿勢をコンポジション・ワークにも取り入れましょう！」ということであった。私のこの主張にはアグニエスツカも賛同してくれている。

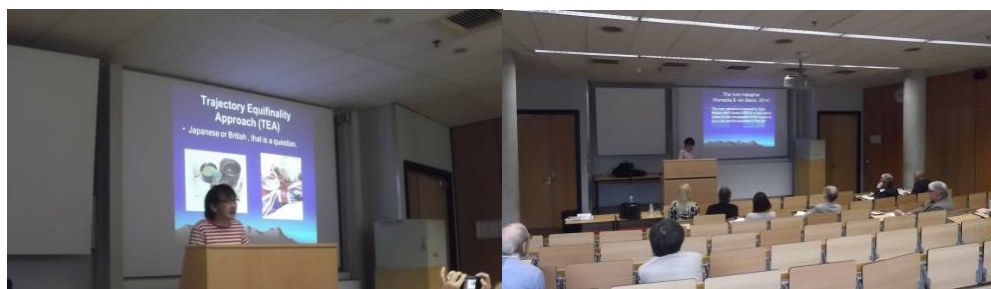
単体であり確固たるものとして考えられている「自己」を構造 (Structure) として開いたのがアグニエスツカの考えだとすれば、自己を時間的に開きましょう、というのが TEM

による提案である。その時に重要になるのが、分岐点（Bifurcation Point）である。構造として表現された「自己の構造」から、分岐点に着目することができるなら一分岐点は単に選択肢があるだけではなく、そのどちらかを選ぶ方向に動くということを伴っているの—そこに時間を読み取ることができるのである。

なお、このことは、TEM から見れば、分岐点においてこそ、対話的自己が現れ、想像が生じ、いずれの道に行くのかが決定される、ということになる。以下、参考まで。



このシンポジウム発表の様子は以下。



さて、もう一つのシンポジウムはスイスのタニア・ジットウン先生と共に企画したもので、抑制的記号ということを経験したものである。

ヴィゴツキーに由来する文化心理学は、主体と客体の間に記号を媒介させる。あるいは、記号が媒介することによってしか、主体は客体と向き合えない、というように考える。その記号の役割には、促進的記号と抑制的記号がある、というのがヤーン・ヴァルシナーやタニア・ジットウンの到達点である。椅子は普通座るものだ。それは、作る人が、座るために作ったからである。文化心理学の立場からは、記号が発生するからこそ、椅子になるのであり、座るという行為を促進する促進記号が発生するから人は座るのである、と説明する。

私が抑制的記号の例として今回提示したのは岡本太郎の「座ることを拒否する椅子」というものである。以下の様な椅子があったとして座ろうと思えるだろうか。たとえば、右端の歯が描かれているものは、何となく座りたくない気がしてくる。

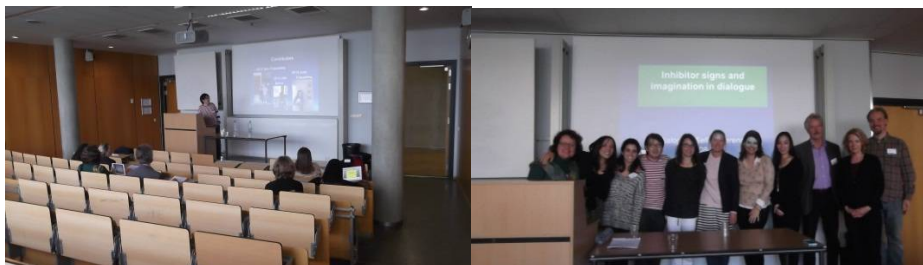


<http://file.kininarukizi.blog.shinobi.jp/Img/1261139358/>

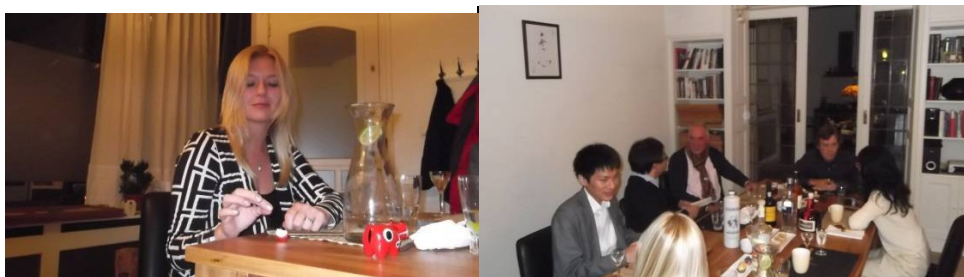
椅子は「座るという行為」を促進する記号を発するべきところ、この椅子は、「座るとい

う行為」を抑制する記号を発するように作っている、というのである。実際にこれは芸術作品であるので、それほど単純でないだろうが。。。

発表の様子と全員での記念写真は以下。



今回のオランダ滞在では、いくつか特筆すべきことがあるのだが、その 1 つは、アグニエスカ・コノプカさんのご自宅にお呼ばれしたこと、である。手料理でもてなされ、神戸大の森岡先生も一緒に、楽しい一時を過ごすことができた。左の写真は、お土産にもってきた会津民芸「起き上がり小法師」で遊ぶアグニエスカ・コノプカさん。右は最後に出てきたお酒の数々。



もう一つの特筆事項は、学会の講演に招待されていた、ケネス=ガーゲン先生との再会。ガーゲン先生にはかつて立命館大学の招聘教授として授業をしていただいたことがあり、その時の院生たちが、それぞれアカデミックな職を得ていると紹介できたのはうれしいことだった。



最後にサトゼミ一同で反省会（をしてるフリ）。最初の学会発表が海外という院生もいる

のだから、私にとっては隔世の感がある。



オランダ編の最後に、恒例となった（個人的感想です）、海外で寿司を食う！のコーナー。今回はハーグのレストラン「Oni」。寿司盛り合わせ、は、まあ普通の感じだったが、ロール（巻物）には、ベルガロールとシルバーレインという見慣れない名前のものがあったので頼んでみた。シルバーレインはサバがメインでタルタルソースのようなものがかかっていた。いずれのロールも中に黒く見えるのが海苔。ウラマキと称しているが、海苔を中に巻き込んでいるのである。



4-3 デンマーク

8/23、デンマークに移動。デンマークは3回目だが、過去2回はオールボーにのみ滞在。コペンハーゲンが初めて。

コペンハーゲン大学が主催する「文化心理学サマースクール」に講師として出席を依頼／招待された。その内容は

International Summer School, 25 – 29 of August, 2014 København

Developmental processes within the cultural life course

Organizers: Pernille Hviid, Tania Zittoun, Jaan Valsiner,
Tatsuya Sato, and Brady Wagoner

This summer-school introduces Life Course perspectives as theoretical and methodological frames for approaching various psychological and social phenomena. Life Course studies are not restricted to a special kind of research design, but considered as a perspective which explores a given phenomenon in its course and context of living, emphasizing culture as the mediating link between the transformation of societies and individuals.

PhD and MA students are encouraged to explore these perspectives – their strengths and weaknesses - by applying them on their own work. Productions of papers serve as part of their passing the Summer-school exam. These papers can later appear in special issues of *Outlines – critical practice studies, Integrative Psychology and Behavioral Science* or in *Culture & Psychology*, thereby contributing the future development of the field.

The Summer-school entails a pre-, present- and post-phase.
(Important for us to be explicit about the expectations and the possibilities during the whole process)

というようなものであり、成果の論文化までも目指す本格的コースである。コペンハーゲン大の学生以外は 1000 ユーロの負担が必要になっている。ちなみにデンマークの大学は、どうやら 3 年間の学士コースに 2 年間の修士コースが連結しており、特別な事情のない人は修士まで取得する。そして、驚くことに、5 年間の学費は無料である。

サマースクールの 5 名の講師は、デンマークのみならずスイスと日本から招聘されており、5 名が毎日出席して指導にあたった。文化心理学のコースなので、美術館や墓地など文化的事跡とふれあうこと（要するに観光？いえいえエクスカーションと呼ぶのです）も授業の一部になっていたのも、朝から晩までねじり鉢巻きで勉強していたわけではない。

また、サマースクール全体のテーマとして「***Be bright-eyed and bushy-tailed !***」を提案したところ、熱狂的な支持を受けた。「目を爛々と輝かせろ！尻尾を力強く振れ！」という意味のオーストラリアの英語で、今は使われない表現らしいのだが、今の私たちにぴったりである。



2014 年 8 月 25 日

講師それぞれの自己紹介の後、参加者も短く自己紹介。ヤーン＝ヴァルシナーの貴重講演。

夜は、講師陣のみでディナー。なんとエチオピア料理。これは初めて！大皿が一枚出てきて、そこに全ての食材が乗っていて、それを手で食べる。



五人勢揃い (from left, Brady, Jaan, Tania, Pernille and Tatsuya)

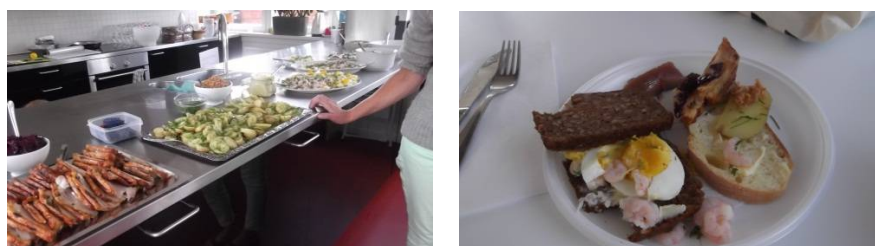


箸はもちろん無いが、ナイフもフォークも無いので、手で食べるのみ！

2014 年 8 月 26 日

午前＝タニア・ジットウン（スイス・ヌーシャテル大学）の講義

昼食＝ペニーラ先生お手製のデンマーク風オープンサンドウィッチ



折角いろいろな食材を用意してもらったのに、あまりおいしそうには作れなかった。。。

午後＝博物館フィールドワーク



夕食はタイ料理でした。



2014 年 8 月 27 日

午前＝ペニーラ・ヴィ先生（デンマーク・コペンハーゲン大学）の講義。ライフコースの理解。



午後＝学生達はグループワーク。

夕食＝全員でいわゆるコンパ。コペンハーゲンにあるクリスチャニアという場所のレストランで会食。この地域は自治を自称しており、アンダーグラウンドな雰囲気満載。一方で、コペンハーゲンにおける 4 番目に大きな観光地であり、年間に 50 万人が訪れる場所でもある。

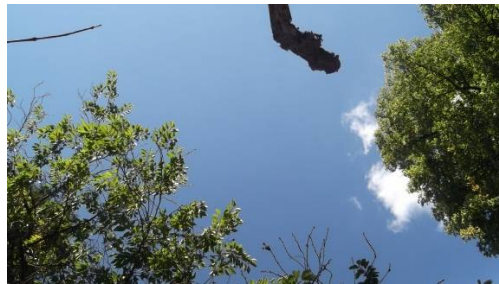


2014 年 8 月 28 日

午前＝ブラディ・ワゴナー&ヤーン・ヴァルシナー先生（デンマーク・オールボー大学）の講義。

午後＝墓地フィールドワーク

墓地に石を置くという不思議なワークもあった。ベンチでのんびり。その後、ベンチで横になり空を見る。本当に久しぶりに夏らしい空を見た。



下は、デンマークが生んだ偉大な哲学者、キルケゴールの墓。



夕食＝おなじみの、外国で寿司を食う！のコーナー。

小舟のようないなり寿司を発見。



2014 年 8 月 29 日

午前＝サトウタツヤ（日本・立命館大学）の講義；TEA（複線径路等至性アプローチ）。以下の写真はイメージです。



昼食＝今日もペニーラお手製のデンマーク風オープンサンド。サプライズで、参加者全員の感謝の気持ちを書いた寄せ書きをペニーラにプレゼント。



午後＝参加者による TEM 実習。それぞれのグループがテーマを決めて TEM を描く。
 なお、TEA と TEM の関係は、TEA（複線径路等至性アプローチ）が TEM（複線径路等至性モデル）をその一部に含む包括的な考え方に関する名称であるのに対し、TEM（複線径路等至性モデル）は人生径路を描く方法論であるということである。TEM は TEA の真部分集合であるが TEA には TEM のほか HSI や TLMG が含まれるのである（何のこっちゃ？という人は TEA のページ <https://sites.google.com/site/kokorotem/> をご覧ください）。

TEA（複線径路等至性アプローチ）をきっかけに、多くの研究者・学生達と交流ができていることを改めて感謝して、稿を終えたい。関係各所（特に資金提供者）に感謝いたします。

次回は、デンマーク・オールボー大学の PBL 視察・訪問記の予定です。